

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 14 日現在

機関番号：64303

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24653115

研究課題名(和文) 資源統治に対する「周縁」の抵抗における「日本的なるもの」の発見

研究課題名(英文) Characteristics of local environmental movements over resource governance in Japan

研究代表者

王 智弘 (OH, TOMOHIRO)

総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員

研究者番号：60614790

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：森と海を視野に入れた分析枠組みで、開発と環境をめぐる日本の経験を再検討した。世界遺産に登録された屋久島では、島民にとっての水産資源の存在が国有林の開発に与えた影響と、漁業者の視点から資源開発史を明らかにした。また、森と海を一体的に捉える漁業者による植林活動を資源の統治に対する抵抗と捉えて、公害反対運動の歴史に照らしながら、その地域性や歴史性、「日本的なるもの」について考察した。各時代の代表的な住民運動に見られる問題を総合的に捉える視角、資源の統治をめぐるアイデンティティの役割、言葉による抵抗に見られるレトリックの特徴など、人文学から資源・環境問題へアプローチする可能性が見いだされた。

研究成果の概要(英文)：Typical studies on natural resources from a social science perspective tend to choose one type of resource—forests or seas. This approach, however, may oversimplify the intricate social relations behind the resource problem and mislead the premise that which resource should be focused. And from a historical viewpoint, it is often the case that strong protests from the sufferers of serious pollution or resource degradation played a critical role in implementing effective regulations. Therefore, this study pays attention to failures of fragmented approach and an emerging trend of environmental movements based on an awareness of the connections between local resources. Focusing on the spread of fishermen's plantations in the 1990s and the fishery industry in Yakushima, the island designated a World Heritage site by its rare forest, revealed the characteristics of natural resource governance and counter strategies of local people.

研究分野：資源論

キーワード：資源 統治 住民運動 環境保全 レトリック 風土

1. 研究開始当初の背景

世界経済の成長と人口増加を背景に、地域社会の開発と環境の両立を目指す概念として、天然資源の持続可能な利用に世界的な関心が集まっている。日本国内に目を向ければ、因果関係が絡み合う資源・環境問題に対して、学問の細分化や行政の縦割りの問題が指摘され、沿岸域や地下水を含む水循環などの一体的な管理が議論されてきた。

農林水産学の各分野の研究には多くの蓄積があるが、個別の資源利用に閉じた議論が多く、コミュニティによる資源管理を考察してきたコモンズ研究やポリティカル・エコロジー研究にも同様の傾向が認められる。森林や漁場などの資源管理の理論化に取り組んできた研究が、共同体や農林漁業などの産業セクターの垣根を越えたシステムとして資源利用を捉え直しているように、天然資源と社会の関係を様々な角度から読み解くための分析枠組みが今日求められている。

他方、近年は環境分野でも自然科学と人文・社会科学の協働による学際的な研究が目指されている。目下のところ制度分析や合意形成などの社会科学との連携が目立っている。また、産官学民の垣根を越えた環境問題への取り組みの重要性も認識されてきた。多様な価値観や立場が絡み合う環境問題の解決に科学コミュニケーションや対話が重要だと考えられるようになってきている。

環境保全にとって制度やルールについての議論や分析が重要なのは論を待たない。だが、環境問題の歴史を振り返ると、制度が構築されるようになるまでの道のりが容易ではない。また、科学的知見の共有は確かに重要なプロセスだが、それだけが鍵だと考えてしまうと、対話は市民が科学者から学ぶことに終始してしまう。情報化社会で最も希少なものは人びとの注意力や関心であり、環境劣化の被害者が社会的弱者の場合、問題を社会の争点とするには他者に訴え、共感を得る力も必要である。

学問分野を超えた連携、あるいは市民との協働への機運が高まる中で、資源や環境をめぐる地域社会の歴史や住民運動を新たな視点や枠組みで捉え直すことで、今日の取り組みに戦略的な示唆や推進力を与えることが期待できるのではないかと。

2. 研究の目的

本研究では森と海を視野に入れた分析枠組みで、日本の開発と環境の経験を再検討する。主な考察対象として選んだのは、鹿児島県屋久島町の林業と漁業、そして、「森は海の恋人」や「百年かけて百年前の自然の浜を」のスローガンで知られる宮城県と北海道における漁業者の植林活動である。いずれも日本における資源・環境保全の制度構築に一定の影響を果たしたと考えられる事例である。

今日、世界遺産に登録された屋久島では稀少な森林生態系の保全に高い関心が払われ

ている。だが、戦後、特に高度経済成長期には国有林の開発と保護をめぐる論争が続いた。当時の島民による自然保護運動の成果が今日の世界遺産登録につながっている。このように社会の高い関心を集めてきた林業とは対照的に、海に囲まれた離島で水産業が注目されることはまれであった。

本研究は、島民にとっての水産資源の存在が国家の森林開発に与えた影響、同時に、漁業者の視点から屋久島の資源開発史を明らかにする。屋久島では明治期に山林の大部分が国有林となり、大正期以後に国有林野事業が本格化する。他方で島民は水産資源に糧を求め、豊かな水産資源の存在が林業従事者の島内確保を困難にさせていた側面が、これまでの文献調査で浮かび上がっている。そこで、本研究では本土と離島という社会階層の構図に、森林資源に水産資源の視点を加えた資源開発史の解明を進めていく。

次に、森と海を一体的に捉える保全活動の事例として、1990年代に全国に展開した漁業者による植林活動を取り上げる。海を生業の場とする漁業者が河川の上流域に植林を行う行為は環境保全や環境教育の取り組みとして様々なメディアに取りあげられてきた。特に宮城県気仙沼市の力キ養殖者と、ホタテ養殖とサケ漁が盛んな北海道漁業協同組合が取り組んだ活動は先駆的な事例として知られている。同時に資源・環境研究の観点からも研究者の関心を引き、これまでに共有資源管理論や環境社会学のテーマとして分析されてきた。宮城県の事例については、植林がダム建設に反対する戦略として取り組まれたことが報告されている。しかしながら、これら個々の事例は分析されているが、漁業者による植林が運動として全国に展開した要因はまだ十分に説明されていない。

本研究では、漁業者による植林を公害反対運動に象徴される日本における住民運動の歴史に位置付けることで、その特徴と教訓を考察する。そして、森林や沿岸域の保全活動を、資源の統治に対する「周縁」の抵抗と捉え、森と海が豊かな列島の特徴を反映した「日本的なもの」として説明を試みる。一般化では捨象されがちな固有性や地域性、歴史性を拾い上げる議論を通じて、日本に限らず、開発途上国における資源・環境問題の理解と対策に役立つ視点の提示を目指す。同時に、まだ十分に意識されていない人文学と環境学の接点を探る。

3. 研究の方法

図1は本研究における事例の捉え方の大枠を示している。まず、天然資源とは、文化、制度(ルール、所有権など)、技術などの要素が合わさり、社会に価値や有用性を見出された自然の構成要素である。天然資源を取り巻く社会は資本や権力などの偏りに応じた「周縁」と「中心」で構成されている。図示した構図を手がかりに、地域社会における資

源への働きかけ、すなわち、生業や資源開発、保護区の設定や自然保護運動の起こりを読み解き、「中心」による天然資源や周縁の開発と統治、「周縁」に属する地域社会や集団・組織の抵抗に認められる特徴と、さらには日本的な様式やパタンの存在を考察する。以下、具体的な調査活動について説明する。

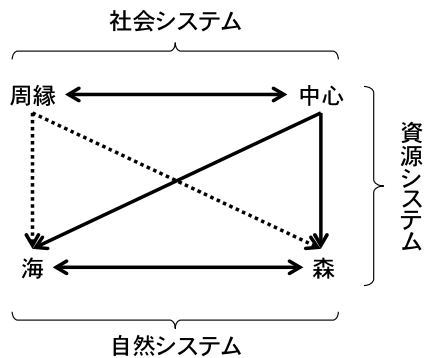


図1 本研究の分析枠組み

(1) 屋久島の国有林野事業と沿岸漁業

昭和40年代の森林保護運動で中心的役割を果たした関係者、島の北端に位置する漁業集落で漁業協同組合関係者に聞きとりを行った。1972年の上屋久町議会による「屋久杉原生林保護に関する決議」、1980年の「瀬切川流域の禁伐決議」に関する当時の発言や立場について町議会議事録を調べた。国有林野事業に関する各種資料、資料の少ない水産業については郷土誌のほかに地誌や紀行文、屋久島が属する熊毛地区の水産統計などを収集した。

(2) 漁業者による植林運動

北海道における活動については、これまで分析視角が向けられてこなかった北海道漁業協同組合連合会に着目する。植林活動の仕掛け人で北海道指導漁連に所属していた人物の著述や、当時の部下だった人物への聞きとりから、活動を思いついた思想や戦略性、さらには運動的側面を検証した。宮城県取り組みについては、活動のリーダーである人物と、活動のキャッチ・フレーズの由来となった歌人の著作、地誌・地域史関連資料を収集した。以上の作業から、特に沿岸漁業従事者が立たされてきた資源問題の社会的構図を明らかにし、植林が漁業者の地位向上を意図した取り組みである側面を明らかにする。

(3) 住民運動戦略の歴史的変遷

上述の事例を日本における資源の統治に対する抵抗の歴史に位置付けることを目的に、明治期以降の公害反対運動に関する既存文献や資料の収集と分析を行った。また、日本列島の南北に視野を広げてテーマに関連する資料の収集を行い、同様の構図で読み解ける事例の発掘と合わせて、海が存在が織り成す周縁の抵抗を「日本的なるもの」として

考察することを試みる。

4. 研究成果

(1) 住民運動にみる総合的な視角の役割

代表的な公害反対運動をあらためて振り返ると、問題を広く捉える視野の重要性を指摘することができる。特に足尾銅山鉍毒事件における田中正造の思想に顕著であり、鉍毒問題が及ぶ広範な行政領域や人権や国家の存亡に関わる問題として捉え、思想や職業の垣根を超えたつながりを築いている。

また、沼津市・三島市・清水町の石油化学コンビナート進出反対運動では、それぞれの地域特性を資源として評価する企業に対して、生活や生産基盤を守るという共通の目的で連携し、農漁業者をはじめ、広く住民の連携を生み出すことに成功した。

「森は海の恋人」の活動は、協働的なアプローチによる環境問題への取り組みのモデルとしても捉えることができる。漁業者は川を通じた森と海の関係についての「仮説」を思いつき、そこから巧みな地域開発への批判の論理と生業基盤の保全戦略を組み立てた。そこに、自然科学は上流域での植林が沿岸域の環境に与える効果を裏付けるメカニズムの科学的な立証に取り組み、社会科学は森と海といった個々の領域を越える新しい資源管理の成り立ちを説明した。科学的な分析とともに、山間部に住む人々は植林地や植林技術、人手を提供し、住民も環境保全活動のボランティアとして、あるいは、環境学習の機会を求めて参加した。そうしたローカルな活動を、全漁連が推進役となって漁業協同組合のネットワークを通じて普及に努め、地方自治体や行政が補助金や制度を準備して運動の展開を支えたのであった。川で結ばれた森と海の生態学的な関係に気づいたことから、手を携えることのなかった沿岸域と中山間地域の住民の関心とつながりを呼び戻す実践へと発展した。広く関係を探り、共通の問題として捉えようとする思考や実践の態度はそれぞれの運動の論理に認められる。

(2) 資源統治と抵抗とアイデンティティ

漁業者による植林運動は、森と海を含む河川流域を視野に入れた地域開発の考え方と実践のモデルを示しているが、その発想や活動は、「汽水人」という言葉で表現された淡水と海水が混じり合う河口に生きるカキ養殖業者のアイデンティティに根ざしている。

資源開発とアイデンティティの関連について、屋久島の資源利用史にも興味深い事実が見られる。上屋久町は、大正時代の漁船動力化によってカツオ漁業が淘汰された後も、さばの一本釣り漁業で栄え、島の基幹産業としての漁業の地位を維持し、島で最大人口の漁業集落が存在していた地域である。そのような時代背景の中で、1938年に地元の林業技術者と作業員の養成を目的に林業の修練所が設けられている。前年の日中戦争開戦、同

じ年の国家総動員法公布を踏まえると、島内労働力の確保、国家総動員体制の一部だったと捉えられる。

修練所の開所式における熊本営林局長の言葉には、明確な農本主義と漁業の除外があらわれている。「農山村の若人としては我建國以来の国是たる堅實にして崇高なる農林業を父祖の業として承継ぎ、斯業の隆昌を期し国の大本たる各種国家資源の培養に努め延いては帝国を永遠の安きに置く中堅国民たらんとする信念がなければならぬと思うのであります」。海に囲まれた島の若者が代々受け継いできた生業が農林業なのか、漁業なのか。それはまさしくアイデンティティにかかわる問題でもある。

屋久島での一幕は国家の統制が極端だった時代の出来事であるが、資源をめぐる統治と抵抗に、物質としての自然の性質ではなく、地域住民のアイデンティティが問題になる側面にはさらに注意と考察が必要であり、環境教育や各種メディアによる情報発信が盛んな今日でも検討に値する視角だと考えられる。

(3) 「修辞」から統治と抵抗を捉える視角

公害被害や環境破壊に抗う人々がどのような声を上げてきたのか。そのような観点で歴史を振り返ると、さまざまな修辞(レトリック)が浮かび上がってくる。例えば、島民の森林利用を制限する屋久島の国有林制度が「網」と表現され、公害を防ぐことができなかった水質二法は「ザル」法と批判されてきた。制度を批判する表現のほかにも、宮城県の漁業者による植林運動のスローガンは「森は海の恋人」(擬人法、直喩)であり、明治期に入り山林を国有林として囲い込まれた屋久島で「庭先から国有林」(誇張法)、国有林の過剰な伐採を非難する「酷憂淋」(同時的音喩)といった表現を目に耳にした。これらは名付けるなら「森のレトリック」と言えるだろう。同様に、「森は海の恋人」は、生態学的なつながりを類推の根拠としていることから、諫早湾の潮受け堤防を形容した「ギロチン」と同類の「生態系のレトリック」と言えそうだ。

修辞は万人が用いることができる日常的な言葉の技術であるためか、環境問題の文脈でも特別な意識は払われてはいない。だが、柳田国男はことわざの起源を他者への攻撃手段とする「俚諺武器説」を唱え、現代の認知科学は比喩表現を支える類推力が幅広い文脈で問題解決に活用される能力だと指摘する。言語表現にも環境問題に取り組む人びとの工夫を見いだすことで環境研究に新たな視界が開ける可能性がある。レトリックの効用と環境運動の成果との関係は証明が難しいと予想されるが、今後のさらなる研究に向けたアイデアと構想を得ることができた。

また、「森は海の恋人」というスローガンはダム建設への反対を前面に押し出すかわ

りに、創造的な文句を掲げることで市民の共感を得たことが活動の全国的展開に大きく寄与した。このキャッチ・コピーは地元の歌人の創作による短歌(「森は海を海は森を恋ながら悠久よりの愛紡ぎゆく」)に由来しているのだが、次の短歌との共通性は興味深い。

紀貫之の娘・紀内侍の歌として知られる「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問わばいかか答へむ」は、立派な梅の木を取り上げようとする天皇に対して、奪われる側の人間の立場からではなく、梅の木にとまる鶯の視点から批判している。自然物に手を伸ばそうとする権力への反発や抵抗としての二つの短歌には、同種の工夫と自然への視線が認められる。古典文学に見られる表現や心性が現代における環境保全活動にも大きな力を発揮しえること、あるいは、せきららにとがめるのではなく、婉曲に諷刺することが尊ばれることは、歴史的に文化的に「日本的なるもの」を思わせる。南西諸島には、言葉の組み合わせによる非現実的な世界を表現するサカ歌を競い合う習俗も存在していた。修辞表現から資源の統治と抵抗を眺める視点については今後さらなる検討が必要である。

(4) 風土コミュニケーションの可能性

現代の風土論をリードするオギュスタン・ベルクによれば、風土は純粋に物理的で客観的な対象でなく、イメージや主観と相互に通い合うものである。また、ベルクは風土を理解するための不可欠な要素として隠喩・暗喩を位置づけている。このことは、修辞は単なる表現の工夫ではなく、風土という捉え方の発露であるという示唆を与える。

レトリック、特に、隠喩・換喩の機能に着目して対話のあり方を問う発想はこれまで見られなかった。ベルクも開発プランナーに風土論的思考を期待しているが、住民参加の場における対話の形式にまでは踏み込んで具体的に検討していない。一般的に、専門家や研究者の語り方、環境認識は客観的で科学的な思考に基づいているが、環境をめぐる対話の場において、隠喩や暗喩を含むレトリックを評価することで、専門家と住民の発言力の偏りが是正できるのではないか。

また、資源政策論の一部として自然が有用な原料になるプロセスを強調してきた資源論に対して、地域に根ざした人と自然の関係を見るのが風土論である。レトリックを風土の考え方に立つコミュニケーションの糸口として、単なる開発対象の発見論に閉じない地域資源論へと展開させる可能性が今後の検討課題である。

引用文献

熊本営林局、熊本営林局、上屋久林業修練所開所式と其の概要、1938

熊谷龍子、北斗出版、歌集 森は海の恋人、1996

5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

Tomohiro OH, A Historical Perspective on Local Environmental Movements in Japan: Lessons for the Transdisciplinary Approach on Water Resource Governance, AGU FALL MEETING, 2014年12月16日、San Francisco (USA)

〔図書〕(計4件)

王 智弘、名古屋大学出版会、戦後日本の環境行政、渡邊誠一郎・中塚武・王智弘編、臨床環境学、2014、pp. 75-85

王 智弘、名古屋大学出版会、環境問題をめぐる住民運動、渡邊誠一郎・中塚武・王智弘編、臨床環境学、2014、pp. 86-98

王 智弘、海青社、資源の分配と社会的分業の展開 近代屋久島の林業と漁業、横山智編、資源と生業の地理学 ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第4巻、2013、pp. 317-341

Tomohiro OH, United Nations University Press, Fishermen's plantations as a way of resource governance in Japan, Jin Sato (ed.), Governance of Natural Resources: Uncovering the Social Purpose of Materials in Nature、査読有、2013、pp. 202-221

〔その他〕

ホームページ等

<http://archives.chikyu.ac.jp/archives/AnnualReport/Viewer.do?prkbn=R&jekbn=J&id=528>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

王 智弘 (OH, Tomohiro)

総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員

研究者番号：60614790